

ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」： 「自己感覚」から「心情」へ

大澤，遼可

<https://hdl.handle.net/2324/4784375>

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（文学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	大澤 遼可			
論文名	ノヴァーリスにおける統合的感官としての「眼」 ——「自己感覚」から「心情」へ——			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	小黒 康正
	副査	九州大学	准教授	武田 利勝
	副査	九州大学	教授	高木 信宏
	副査	九州大学	准教授	東口 豊

論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツ初期ロマン派の詩人ノヴァーリス（1772-1801）が独自の認識論的・自然科学的思考をもとに統合的感官としての「眼」をいかに詩学的に構想したかを明らかにする論考である。

ノヴァーリスは自らの詩学的使命を「一冊の書物に宇宙を見出すこと」だと言う。ここでの「宇宙」Universumとは、ノヴァーリス自身の自然科学的関心と哲学的かつ宗教的関心とが重なる言葉であり、超感覚的な「精神」によって表出された感覚的な世界を指す。だが、私たちは世界がもたらす「精神の啓示」をもはや読み取ることができない。それは私たちが世界における「精神」の連関を認識できないからである。このように世界を捉えるノヴァーリスは、「世界の意味」が喪失する中で、自らの詩的活動を通じてその回復をめざす。それは、人間が世界をいかに認識しうるのか、そして認識したその世界をいかに記述しうるのかという問いに、別言すると、世界の「啓示」を読解する観察者の態度と認識された世界を再び「書物」として提示する記述者の態度に集約されていく。つまり、ノヴァーリスの使命は、「世界」が書物であり「書物」が世界であるという二重の方向において成り立つのである。

以上の解明をめざす本論文は、第一部において「世界の書物化」を、第二部において「書物の世界化」を扱う。第一章は、フィヒテ哲学を批判的に継承しながら世界と自己との根源的な一体感に自我の根拠を置くノヴァーリス独自の認識論を明らかにし、『夜の讃歌』を扱う第二章は彼の関心が具体的な身体へと向けられる経緯を、「フライベルク自然科学研究ノート」を扱う第三章は認識の対象である世界から自らを切り離す近代的な認識モデルとは異なるノヴァーリスの自然科学研究を示し、以上を踏まえて第四章は自らを世界から切り離さない視覚こそがノヴァーリスの言う「眼」であると論じた。続く第二部は、無限に展開する世界を有限の言語によって記述するという矛盾した行為がいかに可能であると問う。その上で第五章はノヴァーリスが「科学的な聖書」と称した世界の全的な記述について論じ、第六章は主観と客観とが根源的に一体となった「自己感覚」Selbstgefühlがあつて初めて失われた世界と自己の一体感の場である「心情」Gemüthが生じ、それを描出する「ポエジー」の成果として未完の小説『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』を論じた。以上を踏まえて本論は、統合的感官としての「眼」に基づく「書物の世界化」と「世界の書物化」という二方向からの実践こそが詩人ノヴァーリスの「使命」だったと結論づける。

以上のとおり、本論文はノヴァーリス文学を身体論的に捉え直す斬新な観点と文献学的な手

堅さからなる秀逸な論攷に他ならない。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつことをここに認める。